群青の春
Spring of ultramarine
危うさ溢れる
30P
行き場のない想いは
春を再び
巡っていく――
荒井はる那

――はい
ということで
ここはしっかりと
ノートにとっておく
ように
そのことに
私だけは
気づいていた
ぱ
ち
あ
目合……

…またただ
また
逸らした
だって
それは
私に対して
だけだった
から
えー千賀の
思い違い
じゃない？
ヒガイモーソー
なっ
なんつーの
大人の男？
ってカンジ⁇
田島先生
いい先生じゃん
まじめだしー
優しいしー
落ちついてるしー
えーーーー？

私と目が合うといつも
まるで見てはいけないものを見てしまったかの様に顔を逸らす
絶対嫌われてるわ……
はー…
……
だから私はそう感じてた

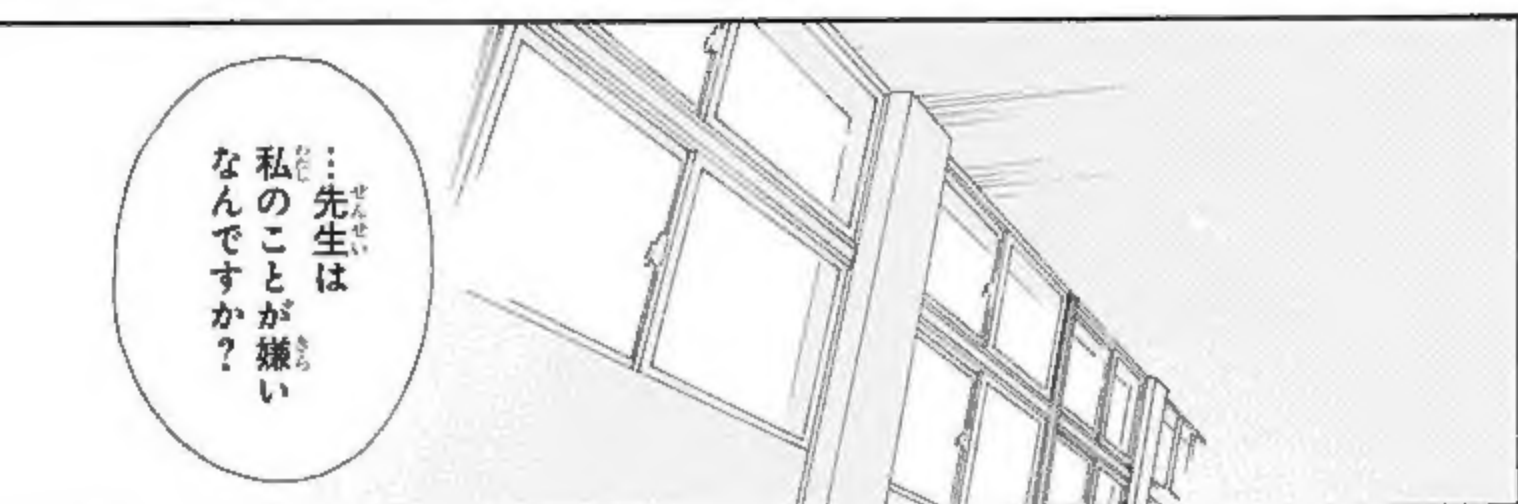
じゃあさ本人に理由訊いてみたら?
!

昔から思ったことはすぐ行動に移す性格だったから
ちょっと行ってくる!!
おー

あ…
千賀か…
どうした？
たたっ
あのっ
ちょっと
質問
が……

!!
ほらまた！
私を避ける
みたいに…っ

…先生は
私のことが嫌い
なんですか？

——え…？
先生
私と目が合うと
いつも逸らす
ずっと
気づいて
ましたよ
私嫌われる
様なこと
しましたか

…なにか
そう思わせてしまったのならすまない
けれど嫌ってるっていうことは絶対…絶対にないから
そんなことを言ってる間も私を見ようとしない

——だったら私のことちゃんと見て
……ッ!

そしたら信じてあげる
………
………ッ

先生の気持ちを
知るには
その表情だけで
充分だった
私だけ
私だけが
知ってる

でも
だからって
私も先生と同じ気持ちになる訳でもなく

あの出来事以降
私が3年になってからも

わざと
近づいたりして
ただただこの状況を
楽しんでいた

ちょ… 千賀
近いって

えーだって
離れてたら
質問したとこ
わかんないし

いーじゃん別に
気にしすぎだって

先生だって一応男なんだから少しは気にしなさいよ

相変わらず目が合うことは少ないけれど時折合う視線はどこかさびしそうで

な？

そして優しい

ん…

…でもそんな事言うくせに私には一切触れようとはしないよね…

別に触ってほしいっつー訳じゃないけど

なんつーの？おもしろくないっていうかっ

うん

ギ

…ああでも近くで見るとやっぱりまっすぐで綺麗な髪してるな千賀は

へっ？

あーーけど直毛すぎて逆に扱いづらいよ

卒業したら染めたりパーマかけたりするんだ

え…そんな

多分 あの時の先生に
いやしい気持ちは
一切なく
こんなに
綺麗なのに
あまりにも
自然な流れで
私に初めて
触れた日
もったい
ないよ
今でも
はっきりと
おぼえてるよ

きっと
このことが
きっかけ
だったんだ

ねむ…

ねーねー
こないだ田島先生が
若い女と一緒にいるの
見ちゃった！

!!?

えっ
マジで!?

ガタ

えっ何それ
ほんと……!?

あ
千賀——

てかあんた今
先生と仲良いじゃん
何か知らないの？

知らない
……

あれっ
先生って今
何歳？

42……

でも先生
背ぇ高いし優しいし
独身なの
もったいないよね

20若かったら
狙いに行ってたよ
あたし

急に不安が
襲ってきた

この時はまだ
その理由は
わかってなかった
けれど

ああ
それは
姪だ

先日舞台
観に行った
ときだな

行けなくなった姉の
代わりに僕が一緒に
行ったんだよ

………
へ？

何だよ
姪かよ!!

？

よろ

…なぁんだ

あー
びっくりして
損した

先生に恋人が
できちゃったの
かと…

えっ

いや
姪だよ
うん…
姪
先生
もっと上手く
隠さないと
てか私も
何でこんなコト
気にしてんの
先生のこと
好きみたい
じゃん…！

………

？
どした…？
調子でも……
――そう
だよね

先生にだって
今まで付き合ってきた
女のひとたちが
いるんだよね
………

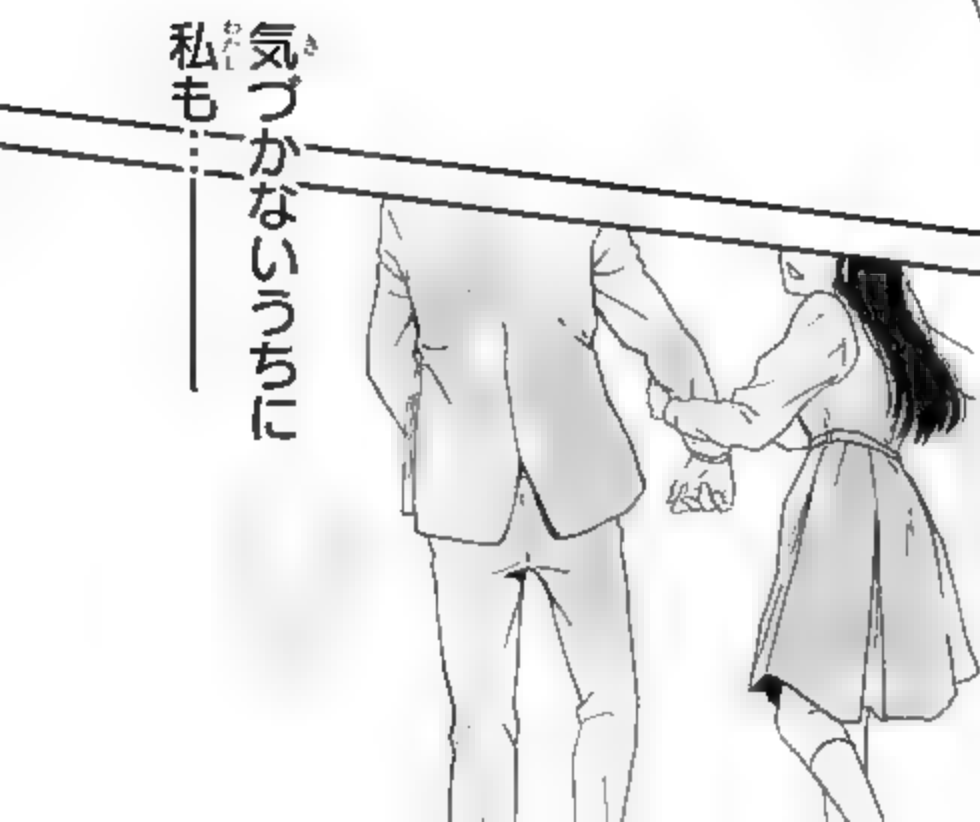
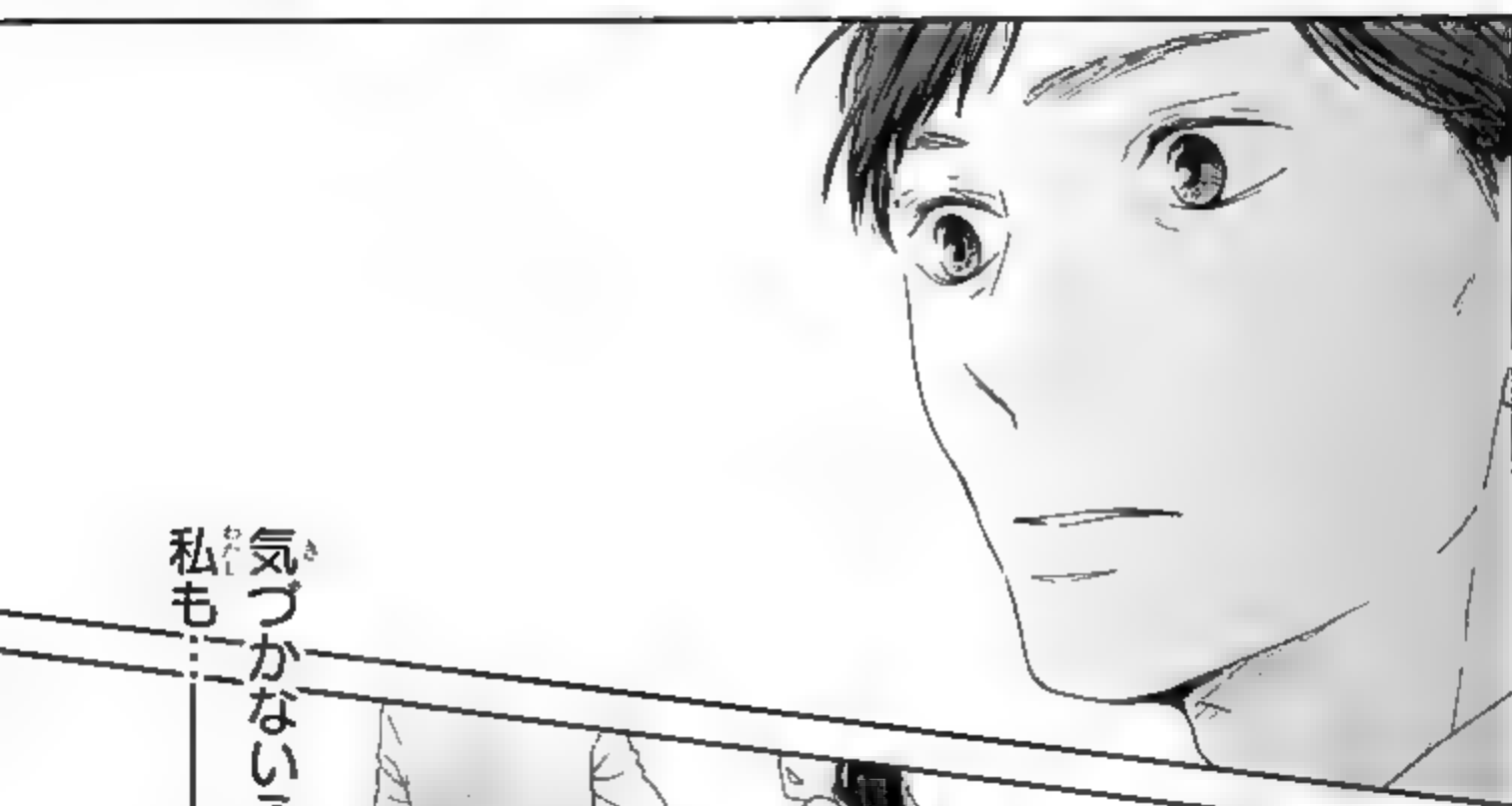
…でもな あなたは優しすぎる。
恋に不器用で だから優しすぎる先生
甲斐性がない。
って見事に みんなから言われて フラれたよ
みんな…
私だって知ってる
…まあ 42年も生きてれば色々あるよ
私の知らない過去の先生
何だろう
この気持ち
ドス黒いものが 体の底から 這い上がってくる 感覚がした
ああこれは

でも今は私のことが好きなんでしょ…？

嫉妬だ

気づかないうちに
私も……——

なぁんて冗談！
あっ私もう
行かなきゃ
じゃーね
先生!!
あ…
千…
……

自分の気持ちを知ってから
先生のそばへ行くのが途端に怖くなった
私が今何をしてもこの気持ちはきっと拒否される
そしてこれまでの自分のしてきたことの残酷さに気づいた
ごめんなさい
ごめんなさい
でも好きなんです
卒業式

田島先生
バイバーイ

さよーなら──っ

ハイ
元気でな

──田島先生

先生
こんな風に話すの
久し振りだね

私も今日で
卒業か──…

…ねぇ 先生
今好きなひと
いる？

――いるよ
こんな年齢にもなって恥ずかしいけど胸がトキメクっていうか
青春を思い出すよ

熟れることも熱を持つこともできない
ひたすら青が深まるばかり

私 先生のことが 好きです
!
好きです 先生
…すまん
気持ちは 嬉しいが

君は僕にとって
これからもずっと
大事な生徒だ
わかってた
先生が
そう返してくる
ことくらい
田島先生
3年間
ありがとう
ございました
だけど
私

お元気で

先生を忘れる気なんてない

——ないよ
生徒と教師なんだから
両想いでも？
ないよ
じゃあ卒業したら
してすぐはだってまだ未成年だろ
…あ？そういう問題じゃあないか…？
そっかーっ相手がハタチになったら良いんだね!!
ちょっちがいやでもあ——……
…しかしそれまで互いに好きでいられる確証はないし
人の気持ちなんてあっという間に変わってしまうものだよ

……
もう2年経つのか…
あっ丁度良かった田島先生にお客さんが来てますよー
? あハイ…
お久し振りです田島先生

私 20歳になったんだよ

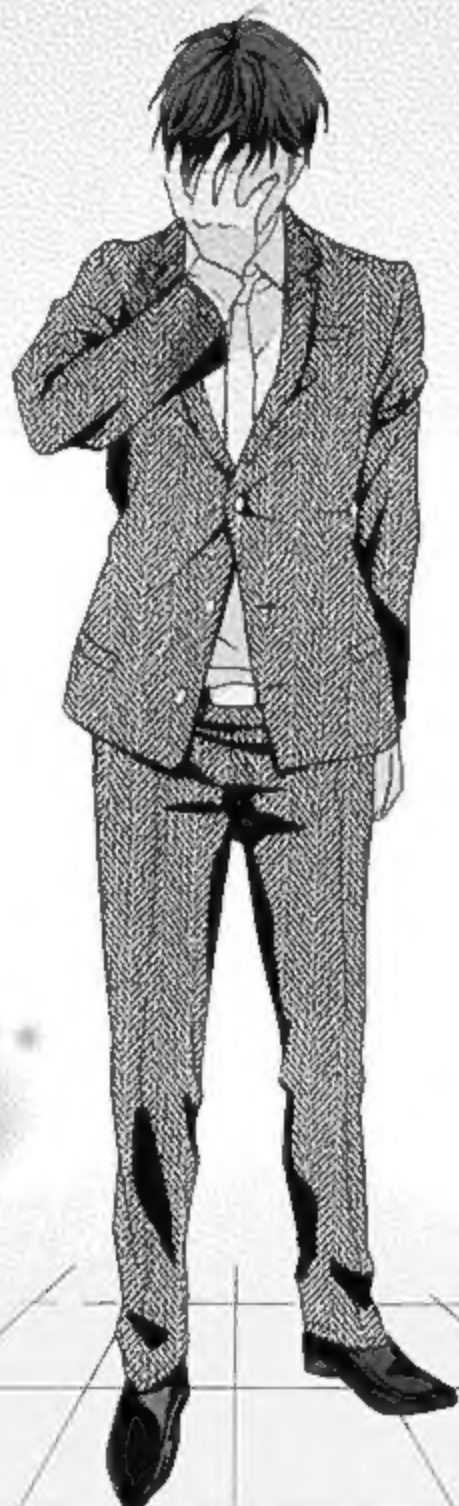
!

2年経っても
私の気持ちは
変わらなかった

先生は…

逃げないで

……ッ

私から
離れないで

一目惚れだったんだ
その明るい性格にも惹かれた
けれど年齢差を考えてみろ自分が情けなく思えたよ
若い君には僕は不釣り合いだ
忘れようと思った
忘れられると思った
だけど

どうしようもなく
好きなんだ
もう
私たちの間に
壁はない
溶けていく

青よりも深い
熱を持ちはじめた
群青の中へ
おわり